お嬢様×お嬢様
ふたりは恋ドレイ!?

わかつきひかる
illustration ◎あきら

美少女文庫
FRANCE SHOTEN

プロローグ　二人はずっと親友

櫻桃女子大学付属高等学校の作法室は、華道部のお稽古の最中だった。

数人の女子高生たちが、畳の上に正座をし花を生けている。花の香りと女の子たちの甘い匂い、楽しそうなおしゃべりが部屋中に満ちて、華やかな雰囲気だ。

「城ヶ崎さん。すばらしいわ。相変わらず力強い生け花ね」

生け花の先生の手放しの賛辞に、黒髪の美しい女子生徒は、晴れがましそうな笑顔を浮かべた。

城ヶ崎小夜子。普通科の二年B組。ストレートロングの黒髪と切れ長の瞳、整った鼻梁、ぽってりした桜色の唇が、日本人形のように見える。

小柄で、いかにもおとなしそうな雰囲気を持つ彼女なのに、生け花は大胆だった。

「百合が高すぎるけど、鳥が飛びたつみたいでステキだから直さずにおきましょう。

動きがあるし、カラフルでいいわね。地のお花が散漫なので、もう少し、そうね。こんなふうにしましょうか」

先生は、生け花用語でいう「地」の位置にあるマーガレットを数本引き抜き、位置を整えた。ほんのちょっと手を入れただけなのに、小夜子の豪快だがどこか不安定な生け花が、見違えるほど美しくなる。

「先生、私もできました」

小夜子の横に座っていた、ショートボブの部員が声をかけた。

織原夏実（おりはらなつみ）。小夜子と同じ二年B組。強い光を宿す黒い瞳と、すっきりした美貌のせいで、快活そうな印象の少女だ。

お雛様（ひなさま）みたいなしっとり和風美少女の小夜子と、ショートカットがさわやかでボーイッシュな夏実。見た目の印象はまったく逆だが、二人は無二の親友だ。

「あら、かわいらしいわ。織原さんのお花って、ほんとうに繊細ね。でも、ちょっと整いすぎて窮屈な感じがしますね。少しバランスを崩しましょう。色味が乏しいから、スターチスもプラスしてくださる？　やり直してからもう一度見せてね」

夏実が花を生け直しているうちに、他の部員たちはみんな、お稽古（けいこ）が終わり、帰る準備を終えてしまった。

まだ生け花と不器用に格闘しているのは夏実だけだ。

「いいわよ。後片づけは私たちがやるから」
小夜子が所在なさそうに立っている一年生たちに声をかけると、彼女たちはほっとした表情を浮かべた。制服のベレー帽を小脇に持ち、花を抱えなおしておじぎをする。
「先輩、お先に失礼します」
「ごきげんよう。テスト前になりますから、次の部活は新学期よ」
「部長、ごきげんよう」
年長者の前では帽子をはずすのがマナーだ。躾の厳しいお嬢様学校の一年生たちは、制服の白いベレー帽を片手に持ちながら退出していった。
華道部の部長で先輩である夏実は、ようやく生け終わり、先生に批評をあおぐ。
「先生、これでいいですか？」
「うーん、そうねえ。もう少し大胆でもかまわないのだけど、これはもう織原さんの性格ね」
先生がちょいちょいと手を入れて、バランスはいいものの、どこか気づまりな生け花を、動きのある楽しい作品に修正する。
「わ、ステキ」
「ねっ、ぐっとイキイキするでしょう」
「ホントですね。先生、ありがとうございました」

「次の部活は八月一日の登校日ですね。お花の用意は織原さんと城ヶ崎さんの二人分だけでよかったのよね」
「はい。先生。登校日のお稽古は、学園祭の練習なので、私たちの分だけでだいじょうぶです」
「そうね。学園祭の実演は、お二人が主役ですからね。では私はこれで失礼します。いい夏休みを過ごしてね」
「はい。先生。またよろしくお願いします」
「じゃあ、また。ごきげんよう」
先生が退席すると、作法室に残されたのは小夜子と夏実の二人だけになった。
帽子を頭に乗せ、生け花のあとは必ず出る大量のごみを片づけ、ほうきで畳を掃いていく。
「小夜子。後片づけ手伝わしちゃってごめんね。ほんとうは一年の役割なのに。遅くなっちゃったね」
「ぜんぜん平気。でも、明日の学食は夏実のおごりねっ」
「あはは。小夜子らしいや。小夜子って見た目、おとなしそうなのにね。生け花って性格出るよねー」
「出るね。夏実も見た目と逆よね。一年の憧れの的の凛々しいお姉様が、実は怖がり

屋さんで恥ずかしがりで引っこみ思案なんて、誰も気づかないよ」
「お姉様っていうのやめてよ。一年生が勝手に騒いでるだけだって」
「でも、バレンタインのチョコは、夏実がいちばん多いじゃない？　ま、夏実が後輩に人気があるのは確かだから、学園祭ではがんばってもらうわよ」
「小夜子のほうが適任だと思うな。だって生け花は小夜子のほうがうまいもん」
「新入部員獲得係は『夏実お姉様』でなきゃダメ。私じゃムリよ」
華道部員は、二年二人、一年三人の五人だけだ。お嬢様学校だから仕方がないとも言えるのだが、華道に関心のある生徒は、学校の部活という中途半端な習い方はせず、教室に通って家元の直伝を受けるなり、師範に来てもらったりして教えを乞う。
だが、同じ伝統系の文化部でも、廃部寸前でヨロヨロと持ちこたえている華道部と違い、茶道部は部員数が格段に多い。これは学園祭や新歓祭で、茶席を設けるせいだ。和服姿でお手前をする先輩に憧れて、入部してくる生徒が多いという。
そこで、華道部も学園祭のとき、舞台の上で生け花の実演をしたらどうかという話になり、部長である夏実が舞台の上で生け花をすることになった。演劇部から緋毛氈（ひもうせん）と金屏風（きんびょうぶ）を借りて舞台を華やかにしつらえ、振袖を着てＢＧＭに合わせて花を生け、生徒たちに見てもらう。
バラバラの花が華道家の手によって水盤の上でイキイキと息づき、整合性のある作

品へと変化していく様子を見れば、華道部に入りたいと思う生徒もきっと出てくることだろう。

「うー、いやだなぁ。なんか胃が痛いよぉっ」

「部長ぉーっ。今から胃を痛くしてどうするのよ?」

学園祭は九月中旬だから、まだ二カ月も先だ。

「でもでもっ、やっぱり心配なのよーっ」

「だいじょうぶだって。夏実お姉様っ！　私が控えに座るからねっ」

小夜子が夏実の背中をぽんと叩いた。控えというのは、生け花をする人の横に座り、水盤を運んだり、花を渡したりする役割だ。

「それ言うのやめてよーっ」

「お姉様ーっ」

小夜子がふざけて抱きついてきた。夏実がヨロめきながら親友を抱きかえす。

見た目は夏実のほうが背が高く見えるのだが、こうして抱き合うと、身長は夏実のほうが少し高いだけなのがわかる。

「もう、小夜子ってばいじわるなんだから。私が好きなのは小夜子だけよ」

「うん。私も夏実が好きよ」

二人はちゅっと唇を重ねた。唇の先だけが触れ合う軽いキスだ。

「あれっ。夏実、またおっぱい大きくなった？」

小夜子が夏実の胸もとを、制服の上から、ぱふっと握った。

凛々しいお姉様として下級生に人気の夏実は、女らしい丸みを持った身体つきをしている。姿勢がよくすっきりして見えるし、着やせするタイプだから目立たないが、実はFカップの巨乳の持ち主だ。

親友に乳房を揉まれた夏実は、お腹をくすぐられた赤ちゃんのような声をあげ、身体をひねった。

「やだもうっ、触っちゃだめっ！　くすぐってやるうっ。えいえいっ」

「あははっ、もうやだぁっ。くすぐったいよっ。もっとおっぱい揉んでやるーっ」

二人は、身体をくねらせてきゃあきゃあと嬌声をあげる。お人形のような外見をしているにもかかわらず、笑いさざめく小夜子はイキイキとしてかわいらしい。小柄な彼女は肉づきの薄い身体をしていて、乳房のふくらみも遠慮がちな大きさだ。

ひとしきり騒いだのち、小学校から一緒の親友同士は指を絡めて手をつなぐと、おでこをくっつけ合わせて見つめ合った。二人が頭に乗せているベレー帽の先端が重なり合う。

「早く帰ろうよ。今日は電車だから、時間かかるよ」

「そうだね」

「夏実、大好きよ」
「私も好き。小夜子の全部が好きよ」
「ずっと友達でいようね」
「うん。私たち、親友だよね」